

- S. M. Gnuchew, et alii. p. 228
 Modernization of Certain Units of the Slabbing Mill Equipment. B. M. Tsirlin. p. 232
 Roll's Gripping. M. S. Goncharevsky, et alii. p. 239
 The Reasons for Variations of Steel Ductility at High Temperature. M. I. Vinograd. p. 255
 Comparison of Results of Metal Controlling for Fine Cracks in Billets and in Ready Products. Z. M. Kalinina. p. 261
 Iron Balance in Blast Furnace Production. L. L. Zusman, et alius. p. 264
 The Economic Appraisal of Steel Production Processes. R. V. Bregman. p. 268
 Anticorrosive Lining of the Pickling Baths by Isobutylene under Layer. V. L. Vinarsky. p. 272

国内最近刊行誌参考記事目次

—学協会誌—

- 日本金属学会誌 21 (1957) 6
 連続ガス滲炭炉に関する研究 (I) 筒井蛙声, 外… 388~392
 鉄鋼中の炭化物の電解分離による研究 (7)
 炭素鋼ならびに低合金の焼戻によつて析出する炭化物について. 佐藤知雄, 外…418~422
 鋳物 29 (1957) 7
 含テルル鋳鉄に関する研究. 前川静弥, 外…490~499
 鋳鉄のガスの研究 (I) 熔湯中のNによる鋳造欠陥の発生について. 池田 滋, 外…499~507
 材料試験 6 (1957) 8
 焼入低炭素鋼の引張強さの分散について. 津村利光, 外…515~520
 鋼の2重切欠に対する疲労強度 (続報)
 河本 実, 外…530~533
 依温における鋼材内の超音波減衰. 樫木義一, 外… 534~537
 分析化学 6 (1957) 7
 鉄鋼中硫黄の微量分析法 (I) 重クロム酸カリ―ヂフェニルカルバジッドによる光度定量法.
 先浜 昭…439~442
 — 6 (1957) 8
 鉄鋼中硫黄の微量分析法 (II) 重クロム酸カリ溶液と亜硫酸ソーダ溶液との反応. 先浜 昭…487~491

熔接学会誌 26 (1957) 7

- 熔着鋼の疲労強度におよぼす銀点の研究. 安藤精一, 外…429~435
 鋼の熔接硬化に関する研究 (I) 木原 博, 外… 442~446
 急速熱膨脹試験による高張力鋼の熔接性について
 守田貞義, 外…465~471
 — 26 (1957) 8
 Anstenite系 Cr-Ni 不銹鋼熔着金属の亀裂感受性におよぼす燐の影響. 藤田輝夫, 外…484~487
 振り予歪軟鋼材のクリープ特性に対する微視的説明.
 合田 進…498~504
 高張力鋼 Wel-ton 55 の連続冷却変態図と熔接変質部の組織および性質 (I) 関口春次郎, 外…504~511
 熔接構造用 HT 60 に関する研究. 鍵和田暢男, 外… 493~498
 — 26 (1957) 9
 高張力鋼 Wel-ten 55 の連続冷却変態図と熔接変質部の組織および性質 (II) 関口春次郎, 外… 579~585
 構造用高張力鋼の予歪による切欠靱性回復について.
 守田貞雄, 外…585~591
 材料試験 6 (1957) No. 48
 製造過程において生じた欠陥を有する材料の疲労に関する研究. 疲労部門委員会研究報告…558~612
 —研究機関—
 Memoirs of the Institute of Scientific and Industrial Research Osaka University 14 (1957)
 Hot Compressive Strength and Spalling of Blacking-Wash for Gray Iron casting.
 Masao Ibaraki et alius. …129~134
 The Influences of the Temperature and Holding Time of Melt After the Addition of Ferro-Silicon on the Graphitization and the Casting Structure of White Cast Irons.
 Masao Ibaraki et alius. …135~144
 The behaviour of Fired Chrome-Magnesite Brick in the Open-Hearth Furnace.
 Takeo Ao et alius. …145~152
 室蘭工業大学研究報告 2 (1956) 2
 低温における鋼の 2, 3 の性質について.
 内藤正鄰, 外…457~465
 東北大学選鉱製錬研究所彙報 13 (1951) 1

- 鑄鉄の酸素その定量と組織におよぼす影響。
 的場幸雄, 外...71~82
 製鋼々滓の酸化力に関する研究 (I) 珪酸または石炭
 飽和の酸化鉄鋼滓の αFeO 測定. 三本木貢治, 外
 ...83~92
東北大学研究所報告 9 (1957) 4
 Photometric Determination of Tin in Iron and
 Steel III. H. Goto et alius. ...253~261
鉄道技術研究資料 14 (1957) 6
 強じん鑄鉄製造法 (I) 佐藤忠雄, 外...270~278
 鋼と砂型材の境界層の顕微鏡的観察. 佐藤忠雄, 外...
 279~285
名古屋工業技術試験所報告 6 (1957) 9
 鍛造における材料の流れの研究 (6) 粟野泰吉, 外...
 464~472
— 会社刊行誌 —
日本鋼管技報 No.10 (1957)
 焼結工場の改造 (I) 舟田四郎, 外...125~136
 鶴見製鉄所第2高炉の改修ならびに其後の操業.
 池上平治, 外...137~147
 軟鋼の塑性曲線およびその応用. 高瀬恭二...167~178
 平面試料を用いた分光分析による鋼中の微量元素
 (Ni, Cr, Sn, As, Al) の同時定量. 佐藤武彦,
 外...179~187
富士製鉄技報 Vol. 6 (1957) 3
 酸素製鉄製鋼法. 森永孝三...225~254
 断続弧光法の鉄鋼分析への応用. 森永武生, 外...
 307~314
住友金属 Vol. 9 (1957) 2
 低温用鋼管について. 大森仁平, 外...98~117
 Fe-Ni-Al 系および Fe-Ni-Al-Co 系合金の X線廻
 折による 2, 3 の実験結果について. 中鉢光雄, 外
 ...118~123
日立評論 39 (1957) 7
 黒心可鍛鑄鉄製管継手の焼鈍管理. 小山代三郎.
— 39 (1957) 8
 鑄鉄の黒鉛組織におよぼすガスの影響 (II) Fe-C(飽
 和) 系の組織におよぼす水素の影響 (2)
 添野 浩...935~940
 炭素鋼の球状化处理について. 吹野晋作, 外...953~956

“八幡時代の私の自慢” 黒田 泰造*

あいつがと思われられるかもしれぬが私でも自慢がある。それは鉄の工場で化工方面はどうも下積になる。例えば技術者の洋行でも数回私への話を部下に譲つて鉄方面の人より比率が余り劣らぬようにすべくつとめたが、とかく化工方面は二番目になり易い。しかし仕事にはとまれ人なのであるから私は毎年の技術者採用人員もなるべく多く貰い、そしてそれ以外にも遇発的の機会ある毎に年々努めて多く採用して貰つた。年取つた先輩が「部下を余り入れぬ人もあるが君は若いのに中々人を入れるね」といつて感心だと賞めて下さつたこともある。その頃自分の将来とか利益など考えなかつたようだ。そしてたゞ仕事の発展を楽しみにしていた。(父がどうして私を苦勞して学校を出し、ここに養子にやつたのかとも思つた事もあつた。)

ある年技術者採用に際し部下より多く欲しい多く欲しいといわれ、それを上役に相談して少し減じて呈出したのを消極的の人より、自分の方は2年も続いて要求しないのに「君は山を張る」など大勢の前で罵られたこともあつた。むかし化工部面は追々東田、前田、洞岡、戸畑とかなり広くもなつたし、続いて国内はおろか満鮮の製鉄所まで当時採用された人々によつて成績を挙げて貰つたのは自慢したくなる。

当時ある技師が私に製鉄事業が化工部門を余り拓げるのは日本人の経営者的の能力からして不可能でないかなどいわれ、いな、日本人を軽蔑しなさんな、などいつた事もあつた。U. S. Steel の社長 Farrel 氏は化学出身である。(私は染料、アルミニウムまたは合成硫酸には八幡自身では進む事は断り、高炉セメント完成をお願いした)。

また工場内で遺利なからしむべく、けちともいわれべき仕事を数々したが、それを君は仕事がないのかなどいわれた事もある。例えばタールバラス、ボロより油およびボロの回収、木材防腐、ボタの再洗および煉炭製造、浮游洗炭(日本での初め) 鉍滓バラス、鉍滓モルタル等。なお当時高炉セメントもあまり用いずに基礎より鉍滓煉瓦および鉍滓製品で工場等(本事務所も)を建てた。鉍滓煉瓦に女を1500人も働いて貰つたが、これは大して黒字でもなかつたが、時の中村、白仁両長官からは八幡には女の仕事がないからとか、八幡を火災から防げ、会計検査院の方はよく説明してやるから安く売れなどと奨励して頂いた。

この頃コークスの化成部門および高炉セメントは別会社となり、耐火煉瓦も分離して益々隆盛となりつゝある。そして化工部門引いては製鉄事業が(せめて今の倍、すなわち英独並に年2000万tまで)一層活躍して貰いたい。とまれ無能不徳だつた私が今や老ぼれて尾羽打からしているが、許されるならば私の自慢は多くの優秀なる人々に楽しく働いて貰い、そしてその人達の働きが相当国の為になつたであろうと思う事である。

* 元、製鉄所(官営当時)化工部長、日本製鉄株式会社取締役